



Messidor Ensemble

メシドール・アンサンブル演奏会

2008年6月29日(日)

ティアラこうとう 小ホール

メシドール・アンサンブル演奏会

ヨハン・セバスチャン・バッハ

管弦楽組曲 第2番 口短調 BWV1067*

- 第一曲 序曲
- 第二曲 *Rondeau*
- 第三曲 *Sarabande*
- 第四曲 *Bourrée I & II*
- 第五曲 *Polonaise & Double*
- 第六曲 *Menuet*
- 第七曲 *Baïnerie*

———— 休憩（10 分間） ————

フランツ・シューベルト

八重奏曲 ヘ長調 D.803**

- 第一楽章 *Adagio - Allegro*
- 第二楽章 *Adagio*
- 第三楽章 *Allegro vivace*
- 第四楽章 *Tema con Variazioni: Andante*
- 第五楽章 *Menuetto: Allegretto*
- 第六楽章 *Andante molto - Allegro*

フルート： 金井麻子
クラリネット： 金内智恵
ファゴット： 布施雅章
ホルン： 田中秀樹
第一ヴァイオリン： 小西達也
第二ヴァイオリン： 孫 尚卿 *
藤平真理子 **
ヴィオラ： 志村和紀
チェロ： 坂本謙太郎
コントラバス： 奥 俊晴

2008 年 6 月 29 日(日) 14 時 00 分 開演

ティアラこうとう 小ホール

ある録音テープに残された会話
～ 曲目解説に代えて～

・・・ガヤガヤ・・・

A: おや、今回は楽章が沢山あって豪儀ですねえ。バッハ(1685-1750)の管弦楽組曲は 7 楽章、シューベルト(1897-1828)の八重奏曲は 6 楽章もありますよ。4 楽章しかないのが普通なのに。

B: 「普通」...ではないな。

A: え？交響曲だって 5 楽章構成なのはベートーヴェンの『田園』(1808)、ベルリオーズの『幻想』(1830)、シューマンの『ライン』(1850)くらいじゃないですか。4 楽章構成が普通ですよ。

B: いやいや。当時の人はそうは思っていないかったんじゃないかな。

バッハは踊る

B: 西洋の音楽が教会と宮廷という二つの場所で育ったのは知ってる？

A: ええ。教会の方はオルガン曲とかミサ曲とか...。

B: そう。宮廷の方は世俗音楽。室内楽や管弦楽はこの一部で、食事やパーティの BGM や、舞踏会で踊るための曲として発展したものだ。

A: だからこのバッハの管弦楽組曲(1720 頃)にも舞曲がいくつも入っているのかあ。でも最初の序曲は？

B: ナンパの時間。

A: なんですか！？

B: 当時の舞踏会は合コンみたいなものだったわけ。相手を探して「一曲いかが？」って誘うにはそれなりの

時間がかかるでしょ。

A: ふ～ん。親近感が沸いてきました。でも、その後に短い舞曲がいくつも付いているのは？折角誘ったなら踊る時間も長い方がいいなあ。

B: 短いのは嫌な相手だったときに、すぐ逃げるためじゃないの。

A: ううっ、身につまされます。曲が多いのは敗者復活戦ですか？

B: 残念ながら...。それは誰でも一つくらいは踊れる曲を入れるためらしい。当時の宮廷には、周辺国や地方からの来賓やお雇い外国人もいたから、各国の舞曲を取り込んだらうな。

A: 演歌以外禁止のカラオケ大会はツライですもんね。

B: よくわからんが...。ブーレはフランスのオーヴェルニュ、サラバンドはスペイン、ポロネーズはポーランドの舞曲なんだ。

A: その辺の来賓が多かったと？

B: あるいは、単に異国情緒が欲しかっただけかも。ともあれ序曲と各国の舞曲で構成される組曲が、宮廷音楽の一つの定型になったのは確かだ。バッハの無伴奏チェロ組曲(1717-23 頃)もこの形だよ。

A: でも、バッハと同時代のイタリアのヴィヴァルディ(1678-1741)には 3 ～ 4 楽章構成の曲が多いですよ。

B: よく気がついたね。17～18 世紀の宮廷と言えば？

A: 『ベルサイユのばら』です。

B: 「ばら」はいらん。当時フランスの

ベルサイユはヨーロッパ文化の最先端で、宮廷音楽の定型が出来たのもフランスだった。

A:隣国ドイツのバッハはフランスを手本にしたんですね。じゃあイタリアは？

B:イタリアはフランスよりも早く、ルネサンス時代(14-15 世紀)に文化が花開いた。音楽でも独自のスタイルがあったらしい。この一つが協奏曲形式だ。

A:協奏曲って独奏楽器とオーケストラの曲ですよ。

B:必ずしもそうじゃない。当時はチェンバロやリュートの独奏曲が協奏曲と呼ばれることもあった。元々の「協奏曲」は器楽の意味だったんじゃないかな。

A:フランス式組曲も器楽ですよ。

B:同じ器楽でも、フランス式組曲は踊るための曲だけど、イタリア式協奏曲は楽器が主役。曲や演奏自体をしっかりと「聴かせる音楽」なんだ。

A:どうやって？

B:十六分音符が連続する派手な技巧とか、速めのテンポとか。それに 3 ~ 4 楽章構成だ。

A:バッハはイタリア式も取り入れたんですか？

B:もちろん。彼の合奏曲のうち、ブランデンブルグ協奏曲(1720 頃)はイタリア式、管弦楽組曲はフランス式だ。名前の通りだね。

A:なるほど、確かにブランデンブルグ協奏曲は 3 楽章構成だなあ。じゃあ 18 世紀後半以降に「普通」になった構成は、イタリアのものだったと？

B:焦るなって。確かにイタリア式の 3

楽章構成は、18 世紀以降協奏曲の一般的なスタイルになっていった。

A:この場合は独奏楽器とオーケストラの協奏曲のことですね。

B:うん。一方、4 楽章構成のイタリア式協奏曲はややこしい。ヴィヴァルディの「調和の靈感」(1711)のテンポがヒントだ。知ってる？

A:第 1 楽章から順に「緩～急～緩～急」が多いですね。

B:そうだね。君の言う「普通」の 4 楽章構成は？

A:「急～緩～メヌエット～急」です。第 3 楽章はスケルツォのことも多いかな。この二つが違うということは...イタリア式協奏曲の 4 楽章構成は忘れられた？

B:いや、僕はイタリア式協奏曲とフランス式組曲が融合して、「普通」ができたと考えている。

A:融合...ですか？

B:「普通」の 4 楽章構成を完成させたのはハイドン(1732-1809)らしいんだ。

A:じゃあ、ベートーヴェン(1770-1827)もブラームス(1833-97)もドヴォルジャーク(1841-1904)もチャイコフスキー(1840-93)も、皆ハイドンがお手本ですか？

B:そうさ。さて、ハイドンの構成では第 3 楽章が舞曲でしょ。イタリアの協奏曲形式には舞曲は入ってないよね。

A:ハイドンはイタリアの「急～緩～急」に舞曲を足したと？

B:うん。あるいは 4 楽章構成という「箱」はイタリアから、中身はフランスから得たとも言える。

A:だとすると「普通」の4楽章構成はフランス式組曲が縮まったものでもあるんですね。

B:そういう見方も出来る。イタリア・フランスという当時の二大先進国から影響を受けたオーストリア人のハイドンならではだね。

A:なるほど。交響曲でも室内楽曲でも第1楽章が他より重厚なのは、フランス組曲の序曲と舞曲の関係が元にあるからとか？

B:かもね。それに交響曲の第1楽章だけを取り出したような管弦楽曲を序曲と呼ぶでしょ？

A:オペラやバレエの序曲じゃない序曲ですか？ブラームスの『悲劇的』『大学祝典』(ともに1880)、チャイコフスキーの『1812年』(1880)、メンデルスゾーンの『フィンガル』(1830)....。

B:それもフランス式組曲の名残だというのが僕の仮説だ。

シューベルトは歌う

A:じゃあシューベルトの八重奏曲(1824)はなんで6楽章構成なんですか？ハイドンより後なのに....。

B:ハイドン以降フランスの組曲形式が忘れ去られた訳じゃないよ。当時の人は4楽章構成が「普通」とも思っていなかった。

A:じゃあ『田園』『幻想』の5楽章構成は当時の人にとっては前衛的でもなかったんですかね。

B:むしろ、ハイドン以前の伝統を思い起こさせたんじゃないかな。5つ以上の楽章を持つ曲は、ハイドン以降

も書かれていたよ。

A:じゃあ、シューベルトの八重奏曲もその一つ？

B:そう。他にもベートーヴェンの七重奏曲(1800)とか、モーツァルトのディヴェルティメント第17番(1779)も典型的な例だね。

A:去年、一昨年メシドールが取り上げた曲ですね。

B:これら3曲はこの時代の室内楽の最高峰だと思うんだ。

A:どうして？

B:編成・内容ともにこれほど充実した曲は他にない。フランス式の多楽章形式とイタリア式の「聴かせる音楽」の両面が見事に融合している。

A:道理で聴き応えのある楽章が6つも....。何でそういう曲が生まれたんでしょう？

B:18世紀末以降、市民向けのコンサートが開かれるようになって、「聴かせる音楽」が主流になったからかな。その頃起こったある事件が関係しているんだ。

A:フランス革命(1789)ですね。『ベルサイユのばら』で読みました。

B:「ばら」はいらんっちゅうに。フランス革命以降ヨーロッパでは市民階級が育って、コンサートに行くようになった。音楽が宮廷から街に出てきたんだ。

A:一般人が音楽を聴けるようになったんですね。

B:一般人といっても豊かなブルジョワ階級だけだね。

A:じゃあ、シューベルトも裕福だったんでしょうねえ？

B:なんでよ？市民が裕福でも、音楽家

にはツライ時代だよ。著作権なんてないし、貴族の庇護もなくなっていたし…。コンサートだって、作曲家の自主公演だから、赤字になることだってあった。

A: 今でいうインディーズ系のバンドみたいですね。

B: 近いかな。才能があってもなかなかメジャーデビューが出来ないのも似てる。

A: 中にはメジャーな作曲家もいたんでしょ？

B: いたさ。シューベルトより少し時代が下るけど、代表格がロッシーニ(1792-1862)とベルリオーズ(1803-69)。パガニーニ(1782-40)とかリスト(1811-86)のような超絶技巧曲を自作自演する人も人気だったようだ。

A: なるほど、シンガーソングライターかぁ。シューベルトもメジャーデビューしたんですよね、結局は？

B: できなかったようだよ。友人・知人の中では才能を高く評価されていたけど、それはウィーンのコミュニティでの話。ヨーロッパ中を股にかけて活躍することはなかった。

A: じゃあ苦労したんですか？

B: そりゃあもう。貧しさの中で、早世したというのが定説だ。

A: でも今はこんなに有名じゃあない

ですか。学校の音楽室にも必ず肖像画がありますよ。

B: 本人もびっくりだろうね。死後 40 年も経ってから、イギリスの音楽学者のお蔭で急速に有名になったんだ。今回の八重奏曲だって、死後 47 年も経ってからやっと出版されたものだよ。

A: その学者はなんでシューベルトに注目したんですかね？

B: ドイツリートという分野を作った人だったからかな。

A: リート？

B: 歌曲のことだよ。オペラでもミサ曲でもないドイツ語の歌曲は、シューベルトが創始者だ。中学校で『魔王』(1815)を聴いたろ？

A: ああっ、そういえば。「歌曲王」って習いました。でも、歌曲と器楽は関係あるんですか？

B: シューベルトの器楽曲には、以前自分で作曲した歌曲のメロディを使っていることが珍しくないんだ。八重奏曲の第 1、第 4 楽章の主題も歌曲からとっている。

A: なるほどぉ。色々知ると、親しみやすくなりますね。

・・・ブー・・・

B: お、開演ベルが鳴ったぞ。楽しむとしよう…。

以上は演奏記録用に設置された録音テープに残された客席の会話を文書化したものです。声の主は不明であり、従って、内容に関して音楽学的見地から真偽は確認されておりません。

メシドール・アンサンブル

「メシドール」とはフランス革命暦にある月の名前の一つで、現在の6月19日から7月18日に相当します。第一回演奏会の開催日、そこで取り上げた二曲の作曲時期が全てメシドールの一ヶ月に収まっていたため、グループ名としました。

メシドール・アンサンブルは演奏会のたびに いつか演奏したいと思っていた曲 を携えた有志が集う緩やかな集団です。このため取り上げる曲の楽器編成も、メンバーの顔ぶれも毎回変わります。今後の演奏会にもご期待ください。

なお、出演者のプロフィール・今後の活動に関しては、当団のウェブサイト (<http://messidor.hp.infoseek.co.jp>) にてご覧頂くことが出来ます。

これまでの演奏会

第一回（2002年7月13日 於：新宿文化センター 小ホール）

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第一番 二短調 作品 49（フルート・チェロ・ピアノ用編曲版）

ブラームス：クラリネット五重奏曲 口短調 作品 115

第二回（2003年7月6日 於：幕張ベイタウン・コア 音楽ホール）

ハイドン：弦楽四重奏曲 二短調「五度」作品 76-2

ビゼー／シンプソン：フルート・チェロ・ピアノのためのカルメン幻想曲

ドヴォルジャーク：弦楽四重奏曲 ヘ長調「アメリカ」作品 96

第三回（2004年2月15日 於：新宿文化センター 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第一番 二長調 K.285 / オーボエ四重奏曲 ヘ長調 K.370 /

アダージョとロンド 八短調 K.617 / ピアノ四重奏曲 第一番 ト短調 K.478

第四回（2004年11月20日 於：ティアラこうとう 小ホール）

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第一番 変ホ長調 作品 12

キュフナー（伝ウェーバー）：クラリネット五重奏のための 序奏、主題と変奏

シューベルト：ピアノ五重奏曲 イ長調「鱒」作品 114

第五回（2005年7月10日 於：ティアラこうとう 小ホール）

ヴォルフ：イタリアのセレナーデ ト長調

モーツァルト／ヴェント：フルート四重奏のための『魔笛』より抜粋

チャイコフスキー：弦楽四重奏曲 第一番 二長調 作品 11

第六回（2006年4月30日 於：ティアラこうとう 小ホール）

モーツァルト／ロットラー：木管五重奏曲 八短調

ベートーヴェン：七重奏曲 変ホ長調 作品 20

第七回（2007年5月13日 於：ティアラこうとう 小ホール）

ベートーヴェン：アダージョとロンド（六重奏曲 変ホ長調 作品 81b より）

ボロディン：弦楽四重奏曲 第二番 二長調

モーツァルト：ディヴェルティメント 第十七番 二長調 K. 334

